

心理査定と言葉についての試論

小林 哲郎

1. はじめに

われわれは、他者に自分の意志を伝える手段として、言葉を話したり文章を書いたりするし、一方で、それらを聞いたり読んだりする。その際、表情、しぐさなどの非言語的コミュニケーションで伝えられるものもあるが、言葉の内容により伝えられる情報は精度が高いし、聞き直し、補足などの相互交流により、より正確に情報を伝えることができる。また、幼児が考えていることを声に出すことを外言といい、発達とともに思考が内言化する事をヴィゴツキーが示したように、思考も言葉を道具としているし、学習、記憶、判断などの様々な認知機能は言葉と密接な関連を持っている。

心理療法においても、セラピストとクライアントのコミュニケーションは原則的には言葉でなされるし、クライアントが言葉になりにくいものを言葉に近づけていく作業ともいえる。

たとえば、来談者中心療法を基盤とするフォーカシングでは、不安、恐怖などの言葉にできる気持ちを「明在的側面」と呼び、「～ではない」としかいえないような、言葉にしにくい「未形成の意味感覚」の体験を「暗在的側面」とよんでいる（池見 陽 1997）。そして、その感覚的なもの（フェルト・センス）を味わいながら見出しをつけるよう促していく方向で展開していくのである。

また、フロイトも「心的治療（魂の治療）」の中で「プシューケーの治療とはむしろ魂からの治療つまり、心身の障害を治療するに当って、何はさておき、まず、しかもじかに人間の精神的なものに作用を及ぼすような手段を用いる治療を指して言っているのである。そういう手段としては、とりわけ言葉を用いる。言葉は、魂を治療するための本質的な工具でもあるのだ。しかし心身の病的な諸障害を、医師の『単なる』言葉によって除去しようとするとは言っても専門外の方にはなかなかわかっていただけそうにない。魔術を信じろと言うのか、と言われるかもしれない。いや、そう言われても、あながち間違いとは言いきれないのだ。われわれが毎日話している言葉は、色褪せてはいるが魔法であることにかわりはないからだ。」というように、本質的工具とか言葉の魔力という表現を用いるぐらい、言葉の力を信じていた。そして、彼の治療技法である自由連想法では、寝椅子に横たわった患者に、思い浮かんだままを話すように要求し、たとえそれが、重要でないとか今の問題とは関係がないとか無意味だとか思えても、そのすべてを話すように厳命したといわれる。

以上はほんの一例にすぎないが、心理療法においては、様々な側面から言葉の動きに考察が加えられているし、二者間のコミュニケーションの上に成り立つものである以上、言葉は必要不可

欠なものである。しかも、無意識に抑圧されたものを意識化することは、精神分析では言語化することと同等に見なされているし、他の療法においても、葛藤をより意識化する方向に、また、混乱を整理する方向にクライアントが変化することを援助する点では共通していると言っていだろう。

ところで、臨床心理学のもう一つの大きな領域である心理査定分野では言葉はどのように使われているのだろうか。査定者と被査定者の関係も問いと答えというコミュニケーションで成り立っている。少し思い浮かべてみても、質問紙検査の各項目は書き言葉により表記されており、それに対して「はい」、「いいえ」や○×などで回答していくし、ロールシャッハ法でも見えたものを話し言葉で答えていく。描画テストにしても、何をどう描くか、自由画で何を書いてもいいことさえも、教示として言葉で伝えられないことには、被査定者はどうしようもないのである。コミュニケーション手段としての言葉は査定をする、されるという立場の二者が対面したときにも、必要不可欠のものなのである。

本論文では、心理査定において、言葉がどのような役割を果たしているのかという視点で、心理査定について整理し直すことを通じて、言葉の機能を見直すことを目的とする。ただ、心理査定は広義には面接による査定なども含まれるが、本論では用具と実施法が明確で形式が整っている心理検査、なかでも性格検査をとりあげて考察を進めることとする。

2. 性格検査における言葉

性格検査は、文章や絵画などの特定の刺激に対して、被検者に回答や反応を求めるという手順で進められる。その結果を、決められた手続きで評定し、パーソナリティについて、いろいろな側面から評価していくものである。形式としては、質問紙法、作業検査法、投影法があるので、それぞれの、実施の手順をふまえながら、言葉がどう使われているかを考えてみることにする。

1) 質問紙法

質問紙法は種類が多いが、市販の代表的なパーソナリティ・テストとして、YG性格検査、MMP I、EPPS、TEGなどがある。MMP Iは本来、精神科領域の診断を目的として開発されたものなので個人施行のカード式もあるが、集団施行用の冊子式の回答用紙や採点版を使う回答用紙もある。YG性格検査のように、用紙に採点法まで印刷されたものもあるが、基本的には、質問部分、回答部分で構成されていて、質問部分は多くの文章で構成されている。また、施行上の注意や回答法などの教示は文章として被検者の目に触れるところに印刷されていることが多い。その上で、検査者が被検者に所属、氏名や検査年月日などの記入を指示して、注意点や回答法などの教示を口頭で伝えるという手順を踏む。いずれにしろ、テストの実施法は、用紙に書かれた言葉だけでもだいたいのイメージがつかめるようになっている。また、刺激である質問文は書かれた文章で与えられるため、同一条件で集団に実施するのに適しているし、評点基準も明快で学校の教科のテストと同じような感覚で受検することを可能にしている。すなわち、同じテストを

同時に多人数に提示し、口頭で指示しながら実施する状況に適しているといえよう。これは、実施のための多くの情報が書き言葉で与えられていることが大きな理由であると考えられる。極端な場合を想像すると、対面状況で検査者がY G性格検査を被検者に黙って手渡しても、被検者はテストに答えるのではないだろうか。質問紙法の多くは、書き言葉による正確で均一な情報伝達を重視しているといえよう。

2) 作業検査法

作業検査は、質問に答えるのでもなく、曖昧な刺激に何か反応をしていくのでもない。純粹に作業課題を与えられて、その課題をこなしていくものである。

代表的なものは、内田クレペリン精神検査である。このテストの検査用紙には、115字の数字が1行に並び、15行の2段、計30行の数字が並んでいる。検査者は1行目から1文字目と2文字目をできるだけ早く加算し、10以下ならそのままの数を、10以上になればその答えの1の位の数字を書き込んでいき、次に2文字目と3文字目、というように1行毎に加算作業をしていくというものである。検査者は、スタートして1分たつと「はい、次。」と号令をかけて15行の加算作業をやり遂げさせる。そして、5分間の休憩の後に2段目の15行の加算作業をするというものである。検査用紙には、検査日時、氏名などの記入欄はあるが、115*30行の数字と集計欄で満たされている。

このテストは、検査者のマニュアルが整備されており、16ステップの教示や実施法などが細かく決められている。このマニュアルに書かれていることを、検査者が口頭で被検者に伝えながら、実施するというテストであり、検査者も、指示を出し続けなければならないし、1分ごとの時間管理に気を遣うことになる。このテストの実施に関しては、検査者の話し言葉による作業手順の説明が、テストの開始から終了までコミュニケーションの中心になる。

3) 投影法

投影法検査には、刺激がインクのシミのような図であったり、絵画のようなものであったり、文字であったり、描画を求められたりと多種多様な検査が含まれる。投影の語義からすると、何らかの刺激に対する反応の中に、無意識レベルも含めた、被検者独自の欲求や、認知的、行動的特徴、いわゆるパーソナリティのある側面が反映されるプロセスを指しているものと考えられる。また、検査であるから、あらかじめ設定された状況の中で用意された刺激が提示されて被検者に何らかの反応を求めて、評定されるものであるし、その刺激、提示状況、評定法は客観的である必要がある。

田中富士夫(1992)は辞書的定義としては「(1)与えられる刺激の非構造的またはあいまい性、(2)求められる反応の自由度が高いこと、(3)人の内部状態を表すパーソナリティ要因を推測する手続きであること、の3点をあげるのが普通である。」としている。また、投影法検査の分類には、

いくつかの方法があるが、たとえば、岡堂哲雄（1993）はリンゼイの考えを元に以下のような分類を示している（筆者の補足、改変部あり）。

- ①連想法 ロールシャッハ法、言語連想テスト等
- ②構成法 TAT（主題統覚検査）、CAT（児童統覚検査）、SAT（高齢者統覚検査）等
- ③完成法 SCT（文章完成法）、絵画完成法等
- ④選択法 ソンディ・テスト、絵画配列法等
- ⑤表現法 DAP（グッテナフ人物画法）、HTP（家と樹木と人物描写検査）、バウム・テスト等の描画法

この分類は、被検者の反応の作業形式から分類したもので、明快でわかりやすいものである。このように、分類の作業を通じて新たな視点が開ける可能性もあり、それが、有意義な知見をもたらすこともあるだろう。本論では、性格検査における言葉の働きについて考えているが、ここで代表的な投影法検査をとりあげて、刺激と反応の中で言葉がどのように機能しているかという観点から分類することを通じて、考察を深めていくことにする。

まず、比較的使用頻度の高い投影法検査について、提示される刺激の側面から分類してみると以下のようなになるであろう。

- ①刺激が写実的なものから抽象的なものまで含めて刺激図のあるもの

ロールシャッハ法、TAT、P-Fスタディ（絵画欲求不満テスト）など

刺激図自体が認知や解釈の多様性を許容するという意味での曖昧なもの（ロールシャッハ法、TAT）、状況は明白に欲求不満を誘発する場面で、反応の多様性が予想されるもの（P-Fスタディ）と中身は多様であるが、いずれも刺激図がある。

- ②刺激が書き言葉で提示されるもの

SCT（文章完成法）

刺激が多数の書きかけの文章で提示され、被検者はその文章から連想されることを、刺激文を含む文章として完成させるもの。

- ③刺激が話し言葉で提示されるもの

言語連想テスト、描画法（バウム・テスト、HTP、風景構成法、家族画法など）

言語連想テストは、単語を読み上げて、それから連想する単語をできるだけ早く言って下さいという内容の教示を話し言葉で伝え、刺激も話し言葉で提示するというものである。このテストでは、検査者側には、記録用紙やストップウォッチはあるが、被検者の方からみると、テストのために視覚的媒介となる物はなく、聴覚的刺激である言葉のやりとりだけしかないことになる。

描画法は、いろいろなバリエーションがあるので、代表的なバウム・テストで考えてみる。言語連想テストとの比較で考えると、描画テストには、白紙、筆記具（彩色するテストの場合は彩色用具）という表現に必要なものがある。しかし、反応を引き出すための決定的刺激ということを見ると、バウム・テストで言えば「実のなる木を一本描いてください」という話し言葉の教

示なのである。とすると、描画テストの場合、作業課題の提示である教示が、刺激（直接、反応を引き出す契機となるもの）の中心になっていると考えることができる。

次に、被検者が、どのような表現方法で反応を求められるかという側面から考えてみたい。上記の岡堂のものは作業課題による分類であるが、ここでは、何を媒体として反応が表現されるかという次元で考えてみると以下ようになる。

①話し言葉で反応するもの

ロールシャッハ法、TAT、言語連想テスト

ロールシャッハ法では、インク・ブロットから知覚されたものを話し言葉で自由に表現させる。TATでは、絵画を中心とした図版をみて空想で物語を作って、話し言葉で表現してもらう。言語連想テストでは、連想したことを口頭で単語で答えてもらう。

②書き言葉で反応するもの

P-Fスタディ、SCT

P-Fスタディでは、漫画の吹き出しにせりふのような形で被検者の反応を書き込む。SCTでは、刺激文から思いつくことを、文章として完結するように、書き足していく。

③課題画、自由画のような描画で反応するもの

描画法（バウム・テスト、HTP、風景構成法、家族画法など）

描画法では与えられた題目の絵を描くことが反応として求められるが、何を書くか、どのような描画特徴があるか、構成なども含め、パーソナリティや環境、興味など被検者に関する様々な側面が投影されるものと考えられる。

3. 反応までの内的過程と言葉

ここで、前節での二つの分類を組み合わせ、刺激と反応の間に被検者の心の中で起こっている内的過程について考えてみることにする。

1) 質問紙法

質問紙法では、質問文を読んだり聞いたりして、自己イメージと照合させながら回答していくのであるが、ここでは一つのケースを想定して考えてみる。

ある人が、YG性格検査を集団で受けることになった。最初の質問である「1. 色々な人と知り合いになるのが楽しみである」に対して被検者の心の中に浮かんだことを言葉にすると以下のようであった。「若い頃はそうだったし、自分から人と出会う機会にもけっこう参加していたが、今はそうでもないかな。それに、誰が参加するかによっても違うしな。友だちのA君だと問題なく○になるだろうなB君なら絶対×だ。僕は嫌というほどでもないし、とりあえず○をしておこう。」

質問紙法のテストを受けるときには、誰もが、このように内言化された思考をしながら、回答していこう。過去と現在で違うときはどうするか、どのような状況を想定したらいいのか、

どの程度の頻度や強度で「はい」としていか迷って揺れながら、どちらかに決定するものと思われる。その決定がどちらに決まりやすいかということ自体も被検者のパーソナリティと関係していることも考えられる。実際、与えられた質問項目に賛成しやすさと反対しやすさをパーソナリティ変数とみなせるという研究もある。(Couch, A & Keniston, K 1960)

また、この各問題文は、書き言葉や話し言葉で示されるので (YG 性格検査の実施法は、集団検査では被検者は検査用紙の書き言葉を見ながら、検査者の読み上げのペースに合わせて答えることになり、個人検査では、検査者が読み上げて、口頭の反応から評定をする。いずれにしても、言葉による提示である。)、被検者たちにある程度共通する特徴をイメージさせることができる。すなわち、「いろいろな人と知り合いになるのが楽しい人」という言葉から各被検者がいづくイメージは、微妙なニュアンスの違いは含みつつも、何らかの共通点があるものと考えられる。なぜなら、人々は言葉を普段からコミュニケーションの道具として用いながら、意味するものを共有化する努力を常に怠らないからである。そうでなければ、人々は、言葉の上に安住していらなくなってしまう。皆もこんなイメージを持つだろうという安心感は、自分自身の感覚への信頼にもつながり、自分の思いや考えを素直に表現する自信にもつながるものである。

この例に戻ると、被検者は、文章からイメージされる性格の側面や、行動特徴を自己イメージと照合させて、それで回答が決まるときもあるだろう。そうでなければ、自分の知っている人たちと自分を相対化、比較しながら「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」と答えるものと考えられる。ここで、なるべく「どちらでもない」を避けるようにという教示がある (YG では「しかしどうしても決められない時には? (どちらでもない) のところへ△印をつけておいてください」) ことが、「はい」か「いいえ」に反応を押し込む力になっているものと考えられる。

2) 作業検査

作業検査として取り上げた内田クレペリン精神検査は、数字という刺激を加算するという単純な作業であり、計算に必要な思考は行わぬが、性格や行動特徴などを照合するようなプロセスはない。また、何かを連想したり、物語を構成したり、絵を描く暇など到底あり得ない。時間に追われながら、ひたすら加算作業をするのみである。その分、質問紙や投影法よりは、さまざまな要因が結果に影響することが少なく、単純なその人の性格や能力が、作業量やその推移、誤答数などに反映されるものと考えられる。余分な要因をとりのぞいた被検者本来の特徴を捉えやすいというのが、この検査の長所である。

3) 投影法

投影法については、前にも述べたとおり多様なので、前節で考察した刺激の側面からの分類と反応が何を媒体として表現されるかという二つの分類を組み合わせることから、論を進めることとする。

①刺激としての図があり、話し言葉で反応するもの

ロールシャッハ法、TAT

②刺激としての図があり、書き言葉で反応するもの

PFスタディ

③刺激が書き言葉で提示され、書き言葉で反応するもの

SCT

④刺激が話し言葉で提示され、話し言葉で反応するもの

言語連想テスト

⑤刺激が話し言葉で提示され、描画で反応するもの

描画法

この分類を元にいくつかの点を論じたいが、まず、刺激が言葉で提示されて反応も言葉でなされるSCTと言語連想テストについて考える。

SCTと言語連想テストは、言葉に対して言葉で応えるというテストであり、心理査定でありながら、心理療法と同じように言葉のやりとりで成立していることになる。フロイトの自由連想法は、思いつくことを何でも言葉にさせることによって、患者の記憶に欠けている抑圧されたものを捉えようとしたものである。また、ユング(1905)も「連想からしばしばだちにコンプレックスの性質を認識して、それによって原因治療の重要な糸口をつかむことができる。」として分析治療の中に連想実験を導入している。このように、病因を追求する精神分析学や分析心理学では、治療の中に患者の言語化のプロセスが組み込まれていて、言語連想テストは構造的に精神的な心理療法に近いものを持っていると考えられる。田中富士夫(1992)は「ゴールストン(1879)にはじまるといわれる言語連想テストは……投影法の幕開けを告げる新しい技法であった。」としている。すなわち、ロールシャッハ法やTATなど現在臨床の場で頻繁に使われる様々な投影法検査が生まれるずっと以前から、言語連想という形式の検査は使われてきたことを指摘しているのである。言語連想テストは、心理療法の治療者、患者の対面構造での対話をモデルに生まれてきた心理検査と位置づけることができるのではないだろうか。

また、SCTの書きかけの文章も、面接場面の問いかけの再現と言っても過言ではないだろう。たとえば、精研式文章完成法の第1文は「子供のころ、私は」である。これは、治療者が「子供の頃、あなたは……」と余韻を残して問いかけた状況を、書き言葉で再現した試みと理解することができる。いわば、質問内容は明示しながらも、聞かれた質問をしていることになる。このような問いかけが対面状況で矢継ぎ早に話し言葉で投げかけられたら負担になりそうであるが、検査用紙に書き言葉で提示されているために、被検者のペースで回答できるゆとりを生み出している。

以上のように、言葉を刺激として言葉で反応を求めるテストは、心理療法あるいは面接場面から発想されたものであると言えよう。そのため、面接場面でも、言葉のやりとりの延長として、場面に馴染みやすいものと考えられる。小林哲郎(1992)もSCT研究のレビューの中で、第二次世界大戦に関連してパイロットや諜報部員などの選抜にSCTが用いられた経緯に触れて「後

の面接の基礎資料にもなるし、現実の行動との関連も理解しやすく、効率的であったからであろう。質問紙では表面的すぎ、ロールシャッハ法やTATではまわりくどかったのかもしれない。」としている。

次に、ロールシャッハ法、TAT、P-Fスタディと描画法を対比してみると、刺激として図があり、それに言葉で反応する前者は、いわば図（絵）から言葉を生み出すテストであり、一方、描画法に含まれる諸技法は、言葉による教示を元に絵を描いていく過程であり、前者と逆の方向であることがわかる。

中井久夫（1992）も、風景構成法とロールシャッハ法の対比の中で、同様の指摘をしている。そして、インクのシミを何かに見立てるロールシャッハ法は、構造主義の言葉を借りて「パラディグマ的選択」をしていることになり、風景構成法は、言葉で与えられたアイテムを絶えず全体の配置をにらみつつ、どこに配置するかを決めるという「シンタグマ的選択」をする事になるという。

ここで、パラディグマ的とシンタグマ的について説明するために、ソシュール（1940）の言語学の考えの中で関連することを簡単に説明しておく。彼は、言語は観念を表現する記号の体系の一つで、それぞれの言語記号は、紙の表裏のように概念（concept）と聴覚映像（image acoustique）が結合したものであり、概念を所記（signifié）聴覚映像を能記（signifiant）と呼ぶことを提唱している。主な原理としては、第一原理は記号の恣意性であり、同じ所記が国によって違う能記で表されることや、「大・中・小」の能記のある国と「大・小」しか能記のない国では、たとえば「大」の所記は違うものになるというような例で説明すれば理解しやすいだろう。次の第二原理が能記の線条的性質であり、聴覚的能記は時間の線の上に順次現れて連鎖を作るというものである。書で表記すれば、書写記号の空間的線条において即座に見えるという。要するに、一回の発話にしろ、一文にしろ、聞き終えたり読み終えて初めて内容が理解できるということである。

このソシュールの理論の中で、言語事項間の関係と差異に関して、二つの秩序があるという。一つは、言語の線条的性質に基づく関係の中で、言葉の配列は全体として意味を持つような結合をする。そのことを統合関係（rapport syntagmatique）といい、統合内にある言葉は、先行するもの、後続のものたちと対立することによって初めて価値を得るのである。もう一つは、話線（今の会話に使われている語）の外で何らかの共通のものを示す語が、記憶の中で連合して、多種多様な関係の結ばれる語群ができることである。ここでは、今使われている言葉にとって代わる可能性のある言葉が記憶の内につながりながら潜在している、これを連合関係（rapport associatif）というのである。たとえば、ソシュールはフランス語で論じているが、話線の中の語（今の会話の中に使われている語）と語幹、接尾辞、所記の類推、聴覚映像の共通性などにより、連合されやすい語が順不同で、無制限に潜在していると考えられるとしている。

中井の論究に照らしてみると、ロールシャッハ法はインク・プロットから連想されるものを言

語化していくものであり、パラディグマ的選択、すなわち連合関係の中からの選択であり、風景構成法は全体を意識しながらアイテムを配置していく点で、シンタグマ的、すなわち統合的選択と考えることができる。ここで、風景構成法は描画法全体に拡大しても、1枚の紙の上に全体の構成を考えながら各パーツを描画すると考えれば、描画法は統合的課題であるといえよう。ただ、中井も指摘しているが「なぐりがき法」で与えられた描線から見えてくるものを絵にする課題は、例外的にきわめて連合的であり、ロールシャッハ法に類似している。

ここで、すべての投影法テストを、統合的、連合的という観点から見直しても、典型的でないものが多くあまり有益でない。しかし、この分類は本来、言語学の中で生まれたものなので、言葉刺激のテストに戻して考えてみることにする。

まず、連合関係はフランス語でrapport associatifであり連想関係と言い直してもいいものと思われる。その点から言語連想テストでは、文字通り刺激語から連想される単語を答えるという課題であり、今まで論じてきた連合関係にあるものの中から、一つの言葉を引き出していることになる。そして、もう一つの言語刺激の投影法テストであるSCTは、書きかけの文章を刺激として、全体で意味が通る文章に完成するものである。ということは、文法的にも妥当性があり、意味が通じる文章を組み立てるという点で、典型的に統合的課題であるといえよう。このように言語刺激の二つのテストの構造を考えていくと、期せずして、言語学でいうところの連合関係と統合関係が見えてくる。このことは、これらのテストを考案してきた人たちが、意図したものであるまいかと筆者は考えている。言葉を使ったコミュニケーションを成立させる根本にある秩序が、たまたま心理検査という道具の中に組み込まれていったのではないだろうか。検査というものが、関係性から抽出される被検者の性格を、第三者にもわかりやすく示すように洗練されていく中で、結果的にこの二つの検査が生まれて、使われつづけてきたのではないだろうか。

また、クーンら(Kuhn, M.H. & McPartland, T.S. 1954)により開発された20答法は、「私は誰だろうか」という質問に、20通りの異なる回答をしてもらうものである。これは具体的には「私は」という刺激文の文章完成を20通り求めるものである。「私は……」の「……」の部分に入る言葉はすべて連合関係にあるものであり、言語連想テストが連合関係にある言葉の一つを求めるのに比べると、20の連合関係の言葉を求めていることになる。

4. おわりに

本論では、性格検査の中で言葉がどのように使われているかという観点から、性格検査を概括してみた。その中で、とくに投影法において、刺激が図か言葉か、反応が言葉か描画かという分類とその組み合わせを通して、いくつかの新しい視点が見えてきた。そのことを考察するために、ソシュールの言語学でいう言語の根本的秩序である連合関係と統合関係の考えを、性格検査の構造を解明する手がかりとして利用した。その視点から見ると、絵から言葉へと連合関係を使うロールシャッハ法もあれば、言葉から絵へと統合関係を使う描画法もある。また、刺激にも反応

にも言語を使う言語連想テストとSCTは、言葉の連合関係による連想と統合関係による文章の完成を求めている課題であると考えられることがわかった。今後も心理検査と言葉に関連する考察を深めていきたい。

引用文献・参考文献

- Freud,S. (1905) : Psychische Behandlung. (フロイト「心的治療 (魂の治療)」小此木啓吾訳
フロイト著作集9 人文書院 25--43.)
- 日本・精神技術研究所編 (1973) 内田クレペリン精神検査・基礎テキスト 日本・精神技術研究所
- 田中富士夫 (1992) : 投影法. 氏原寛他編, 心理臨床大事典. 培風館, 515-519.
- 岡堂哲雄 (1993) 心理検査学. 垣内出版, 83-84.
- Couch,A & Keniston,K (1960) : Yeasayers and Naysayers:agreeing response set as a
personality variable. J. Abnor.& Soc.Psy. Vol.60 No.2. 151-174.
- 辻岡美延 (1983) : 新性格検査法. 日本・心理テスト研究所.
- 小林哲郎 (1992) : SCT (文章完成法). 氏原寛他編, 心理臨床大辞典. 培風館, 537-542.
- フェルディナン・ド・ソシュール (1940) : 一般言語学講義. 小林英夫訳 岩波書店.
- 中井久夫 (1992) : 風景構成法. 精神科治療学7巻3号. (山中康裕編著 1996 : 「風景構成法
その後の発展」岩崎学術出版社, 所収)
- Jung,C.G. (1905) : 精神分析と連想実験. (林道義訳 1993 : 「連想実験」みすず書房, 所収)
- Kuhn,M.H.& McPartland,T.S. (1954) : An empirical investigation of self-attitudes.
Amer. Soc. Rev. Vol.19. 68-76.